

学修成果の可視化に向けた PDCAサイクルの確立

学修成果の可視化を実現することで、
何ができるようになるのか？ 大学評価の研究者に聞いた。

「どう測定するか」の前に
考えるべきこと

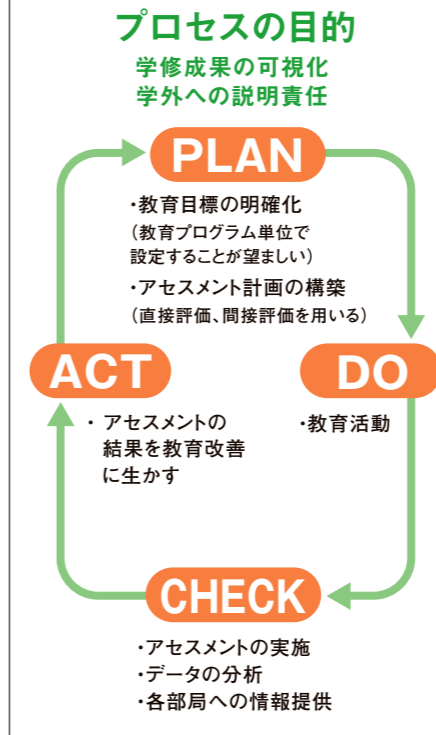
学修成果の可視化の議論では、「どう測定し、評価するか」という、アセスメントの機能が注目を集めます。これはPDCAサイクルに当てはめるとCheckの部分ですが（下の【図表】参照）、より重要なのはPlan「教育目標の明確化」です。具体的な教育目標がしっかり定まっていれば測定・評価をしても意味がありません。これから本格的に学修成果の可視化に取り組む大学は、まずはここから着手すべきでしょう。

教育目標は、各大学の「使命」や「3つの方針」といった形で、学位（学部）単位で定められていくケースが多く見られますが、理想的には教育プログラム（学科・

コース）単位で決めたほうがよいと思います。例えば、同じ工学部の学科であっても、電気・電子工学、機械工学、情報工学では、それぞれ教育目標もカリキュラムも異なるからです。

こうした考えから山形大学では、教育プログラム単位で教育目標と3つのポリシーを定め、授業の到達目標がディプロマポリシー（DP）、カリキュラムポリシー（CP）と合致しているかどうかを、各教育プログラムの責任者がチェックするようにしています。場合によっては、到達目標とDP、CPが完全に合致していない授業も出てきますが、その原因を探り、「授業の到達目標を変えたほうがよいのか、そもそもDP自体を修正すべきなのか」を議論するようにしています。

【図表】学修成果の可視化に向けたPDCAサイクル



山形大学 学術研究院 教授
企画評価・IR担当
浅野 茂
あさのしげる ● 2006年神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程修了。2015年より現職。2009年より大学評価コンソーシアム副代表幹事。現在の研究テーマは、IR、大学経営と意思決定、大学評価に関する研究。

取材・文／本間学

直接評価指標として独自に 基盤力テストを開発 —山形大学—

3つの分野における 学生の能力、成長を測定

山形大学は、直接評価の指標の一つとして、基盤力テストを開発。卒業までに3回（1年次入学当初、1年次終了後、3年次）実施することにより、大学全体のディプロマポリシーに示した「卒業時に全学生が身に付けてほしい能力」と、各学位プログラムDPの到達度測定に活用している。

この基盤力テストは、「学問基盤力テスト」「実践地域基盤力テスト」「国際基盤力テスト」の3つから構成される。「学問基盤力テスト」「実践地域基盤力テスト」は、同大学が提供するスマートフォンアプリ「YU Portal」上で、大学独自の問題を使って実施し、「国際基盤力テスト」の直接評価としては、外部英語検定試験のスコア等を活用するという。

知識の多寡ではなく 学生の能力を測るテスト

学問基盤力テストは、入学者の学士課程

での学ぶための力の確認と、入学後の伸びを計測するものだ。テストで測るのは知識ではなく、学問としての概念の理解になる。

試験科目は「数的文章理解」「数学」「物理学」「化学」「生物学」。問題は教員が作成し、大学院入学試験の過去問も活用している。授業時間を圧迫してはいけないという考えから、試験時間は30分に設定。少ない問題数で学生の能力を測るために、項目反応理論を使って受検者ごとに難易度を調整している。今回、「数的文章理解」を全学部、その他の試験科目を理学系学部対象に実施した。「数的文章理解」は、どの学部の学生にも必要とされる論理的思考力を測ることを目的としていることから、より実態に即した名称への変更を検討している。

このテストの計測結果を分析し、授業の進捗の調整や、カリキュラムの科目配置の見直しも行っているという。

実践地域基盤力テストは、個人の性格を「外向性」「協調性」などの5因子で指標化し、調査するもの。70問の設問に対して「は

い」「いいえ」で回答する。所要時間は5分程度。結果はレーダーチャートで表示され、受検者は自分の強みが確認できる。

このテストは入学時のみ実施しているが、大学生活の中で、さまざまな経験（フィールドワークや留学など）を重ねることにより、学生が成長することも考えられるため、3年次にも測定することを検討しているという。

分析結果は教学改革に活用 学生へのフィードバックも

基盤力テストの結果は、2016年度に設置した次世代形成・評価開発機構のIR部門で、出欠状況やこれまでの入試情報、GPA、卒業生調査と併せて分析を行う。結果は、カリキュラムの点検・評価に活用されるほか、学生へのフィードバックとしてディプロマ・サプレメントの発行も考えている。これをどのような形にするかは検討中だが、「就職活動に活用できるなど、学生にとって有益な形にすること」を念頭に置き、学外の関係者も交えながら議論していくという。

山形大学が設定する3つの基盤力とその測定手法

	内容	測定手法
学問基盤力	自律的に課題に取り組む専門力	・学問基盤力テストの実施 （「数的文章理解」「数学」「物理学」「化学」「生物学」）
実践地域基盤力	社会でリーダーシップを発揮する人間力	・キーコンピテンシー調査（5因子調査） ・出席状況、ポートフォリオの評価 ・フィールドワーク、インターンシップ、課外活動の実績を評価
国際基盤力	実践的な英語で多様性に挑戦する国際力	・外部英語検定試験の受検 ・eラーニング、留学などの実績を評価



キーコンピテンシー調査のスマートフォン画面

と、客観的な直接評価の両方を取り入れて成果を示していかなければならないでしょう。本学では独自の直接評価（基盤力テスト、キーコンピテンシー調査）を導入し、全学部共通で学士課程の学修成果を測定しています（上のコラム参照）。

質保証に向けてPDCAを 永続的に回すこと

現在、学修成果の可視化は自学の教育プログラムの点検・改善に取り組み、「学生の卒業時の能力を保証する」という点で重要視されていますが、学外への説明にも大きな役割を果たします。

DP、CPや各授業の見直しの適切な測定手法の設定など、手間と時間がかかることは間違いありません。しかし、自学が提供するものになっていくかを常に点検し、外部に対して「問題ない」と示せるようにすること、あるいは「問題があるから、このように改善した」と説明できるようにすることこそが質保証だと言えるでしょう。そして、そのPDCAサイクルを永続的に回そうとする努力が、今、社会から大学に求められているのだと思います。